

合理的配慮の提供事例報告書【小学校】

事例の概要

自閉症のB児。注意の転導性が強く、集中が続かなかったり、国語が苦手で、文章を読んで情報を取り出し問題を解いたり、文章を書いたりすることができない。また、社会性に課題があり、友だちとうまくコミュニケーションをとることができない。

このB児に対し、①パーテーションで区切り個別の学習スペースを提供する、②ソーシャルスキルを正しくインプットするための教材を活用する、③発達段階にあった読解教材をB児のプライドを傷つけないように準備する、などの配慮を行うことについて、保護者・専門家を交えて合意形成に至った。

その結果、B児の学習効果が上がり、ソーシャルスキルも少しずつ身につけ始めている。

1 対象児童の障害種

自閉症

2 障害の程度

※学校教育法施行令22条の3に該当か非該当か

3 在籍状況

小学校・特別支援学級

4 学年

小5

5 対象児童の実態

自閉症。新版K式発達検査2001 発達指数 全領域72 認知適応71 言語社会74。

衝動性が強く、待ったり、ゆっくり作業したりすることができない。

こだわりが強く、時間割変更や予定が変わったりすると混乱し、質問を繰り返す。

注意の転導性が強く、他の子が何をしているのかが気になり、作業に集中できない。

聴覚情報よりも視覚情報に強く、言葉で説明してもわからないが、絵や図で示すと比較的理解しやすい。

特定のものに対する記憶力に優れ、他の子では覚えられないようなことをよく覚えている。

（友だちの誕生日、都道府県、漢字など）

国語が苦手で、文章を読んで情報を取り出し問題を解いたり、文章を書いたりすることができない。

感覚に過敏さがあり、特に聴覚、触覚に強い過敏が見られる。

6 対象児童についての合意形成に至るまでの経緯

（1 誰からの申し出か 2 申し出の内容 3 連携、調整した関係機関 4 合意形成に至った結論）

昨年度より合理的配慮の提供を行っていたため、年度当初にこちらからどのような配慮をしていくのかを保護者に確認した。

保護者の方からの申し出としては、「聴覚情報よりも視覚情報を多用してほしい」「苦手なことに対して、十分サポートしてあげてほしい」「感覚過敏に対する配慮をお願いしたい」といったことが出された。

この件について、支援員である心理士Aに相談し、具体的な配慮の仕方について指導いただいた。

この内容については、校長に確認し、配慮可能であると判断されたため、保護者との合意形成に至った。

7 基礎的環境整備の視点と概要

基礎⑤ 施設・設備の整備

自閉症・情緒障害学級には、児童が2名在籍している。特にB児は注意の転導性が強く、C児のやっていることが気になり集中できなくなる。そこで、教室にパーテーションを2つ準備し、個別の学習スペースを作った。また、個別の学習スペースでは、それぞれの発達段階にあった教材を入れて、上から順にルーティーンワークできるように、レターケースを準備した。

8 合理的配慮の観点と概要

合理①-1-1 学習上又は生活上の困難を改善・克服するための配慮

B児は、先生や友だちとうまく接することができない。そこで、専門家の助言を受け、「ソーシャルスキルフラッシュカード」や「ソーシャルスキルかるた」など、ソーシャルスキルを学習できる教材を準備し、毎日の自立活動の時間に学習を行っている。最初は言葉を覚えるだけだが、2学期に入ってからはそのような状況でその言葉を使うのか、どのような場面でそのように振る舞えばよいのかもあわせて指導するようにしている。

配慮する点として、できなかったことを指導するのではなく、できたことをほめることで自尊感情を損なうことなくソーシャルスキルを身につけさせるように気をつけている。

合理①-2-1 情報・コミュニケーション及び教材の配慮

B児は、国語の読解問題が苦手である。そこで、同学年の読解問題ではなく、1、2年生用の読解に特化した教材を準備した。この教材は、1、2年生用ではあるが「総まとめ」という言葉がテキストについているため、B児のプライドを傷つけることなく、1、2年生レベルの読解問題を練習することができる。また、最初の問題が「なぞり問題」になっているため、必ず正解することができることも、B児の自尊感情を下げずに学習を進めることができる。

作文は、毎日の「ふりかえりノート」を学習ととらえて指導している。「好きに書きなさい」では何も書けないので、文章のアウトラインを示し、そのアウトラインに従って文章を書くように指導している。

9 成果と課題

個別の学習スペースを作ることで、B児もC児もそれぞれに影響されることなく、学習に集中して取り組むことができるようになった。一方で、B児は聴覚にも過敏があり、C児のかすかな音にも反応してしまうため、イヤーマフなど聴覚情報を遮断する環境整備が、今後必要になるだろう。

ソーシャルスキルは、かるたやカードを使って正しい行動を直接指導しているため、考える必要がない。自閉症のある子どもたちの場合、その場をイメージすること自体が難しいため、直接インプットする方が効果的であるようだった。少しずつではあるが、友だちとの交流も増え、目上の人にも丁寧語を使って話をする場面が増えてきた。

B児の読解力は、確実に向上している。1、2年生レベルの問題ならば確実に情報を取り出すことができるようになった。また、ふりかえりノートも1学期は教師の補助が必要だったのが、2学期に入り、自分一人で書くことができるようになった。B児に合理的配慮が適合していると考えてよい。

一方で、当該学年の読解問題はまだまだ難しく、長文を書くこともできるようになったわけではない。今後、スモールステップで、少しずつレベルを上げ、B児の発達に応じた学力を保障できるような教材を与えていく必要がある。